血の日曜日と戦艦「ポチョームキン」

血の日曜日の前夜　　第八巻　革命の日々　P109

われわれは、運動の経過をものがたるにあたって、ガポンの発議で、一月九日の日曜日に労働者大衆が冬宮にむかって行進し、憲法制定議会の召集についての「嘆願書」をツァーリに上呈することに決まったいきさつを、くわしく述べた。すでに、一月八日の土曜日には、ペテルブルグのストライキはゼネラル・ストライキになった。官庁情報でさえ、罷業者の数を１０万ないし１５万とみつもっていた。ロシアは、階級闘争のこのような巨大な爆発をまだ見たことがない。人口１５０万の大中心都市の工業・商業・社会の全生活が麻痺した。プロレタリアートは、彼らによって、しかも彼らによってのみ、現代の文明がささえられており、彼らの労働によって富と贅沢が創造されており、彼らのうえにわれわれの「文化」全体が立脚していることを、実地にしめしたのである。市は、新聞も、照明も、水もなしになった。しかも、このゼネラル・ストライキは、明確に表現された政治的性格をおびており、もろもろの革命的事件の直接の序幕であった。

ロッジの蜂起、イヴァノヴォ−ヴォズネセンスクの殺戮、ワルシャワとオデッサのゼネラル・ストライキ　　第八巻　P614

1905 年一月九日の血の日曜日以後、労働者の闘争は急激に政治的性格をおび、さらにメーデー以後の闘争は全国的にひろがっていった。 ポーランドの大工業都市ロッジでは、六月二十二〜二十四日の三日間、労働者はツァーリの軍隊と市街戦を行った。この戦闘は、ロシアにおける労働者の最初の武力行動であった。

イヴァノヴォ−ヴォズネセンスクでは、五月末から八月初めまで大規模なストライキが行われた。ある労働者集会のさい、軍隊が労働者にむけて発砲し、数十人の労働者がころされた。このストライキのあいだに、ロシアにおける最初の労働者代表ソヴェトとみなされる、労働者全権代表ソヴェトが創設された。

ワルシャワでは、メーデーのデモンストレーションに軍隊が発砲したのにたいして、労働者は、ポーランド社会民主党の呼びかけに応じて抗議のゼネラル・ストライキをもってこたえた。

オデッサでもそのころ労働者のゼネラル・ストライキが行われ、六月に反乱した戦艦「ポチョームキン」は闘争中のオデッサに回航した。

戦艦「ポチョームキン」の反乱　　第八巻　P615

1905 年六月、黒海艦隊の戦艦「ポチョームキン」の水兵は反乱をおこし、乗組の上官をかたづけて、ゼネラル・ストライキが行われていたオデッサに軍艦を回航した。ツァーリ政府はこれを討伐するため軍艦数隻を派遣したが、それらの乗組員は自分たちの同志に発砲することを拒否し、こうして数日のあいだ「ポチョームキン」には革命旗がひるがえっていた。しかし、革命運動を指導する勢力がボリシェヴィキだけでなかったのと、水兵のあいだに十分な意識がかたまっていなかったので、決定的な時機に動揺がおこり、「ポチョームキン」はルーマニアに行って投降した。こうして反乱は敗北におわったが、しかし、この反乱は陸海軍での最初の大衆的な革命的行動であった。